

日本の沖縄は東シナ海に位置する美しい島で、東京からは飛行機で約2時間半の所にあります。多くの日本人が休暇を過ごす観光地であるとともに、およそ3万人の米軍人と家族、先生やその他軍属が住む所でもあります。大半の者にとって、沖縄は楽園そのもの。独特の素晴らしい文化を持ち、人々は親しみやすく友好的です。ところが、沖縄での暮らしは動物好きの心を悲しませ、当の動物にはさらに痛ましい悲劇となっているのです。

沖縄では、ペット過剰繁殖問題が深刻さを増しています。沖縄県動物愛護センター(大里村)に収容される動物のうち、飼い主のもとに戻るか、里親に引き取られるのは1割にすぎません。ということは、2004年1年間に、1万2千匹もの子犬／猫、成犬／猫が殺処分されたことを意味します。沖縄が(長さ)65マイル×(幅)3～7マイル(約105km×約5～11km)の島であることを考えると、この統計は恐るべきものです。例えば、東京都には沖縄の10倍の野良犬猫がいます。ところが、沖縄県動物管理局は毎年、東京都動物管理局の3倍もの動物を殺処分しています。大里に持ち込まれるペット以外に、飼い主に捨てられ、島で自活を余儀なくされるものも数多くいます。彼らは、飢え、病気、自動車事故などによって悲惨な運命をたどることが多いのです。私たち Okinawan American Animal Rescue Society (沖縄・アメリカ・動物を救う会) はこれら不幸な動物の代弁者となるべく設立されました。

OAARS は、2004年の設立以来、様々な活動を通して、きわめて有効な団体であることが証明されています。私どもは、島での深刻な動物危機に立ち向かうには多面的アプローチが必要だと考えます。独自の「フォスター・ケア(養育)制度」により今までに約200匹の犬猫をリホームさせてきました。また、ペットを連れて米国に帰国する人のために数多く手助けをしてきました——航空会社に動物搭乗の予約をしたり、空港の検疫所までペットを運ぶとか、必要書類に書き込む手伝いとか、健康証明書のため動物医院に連れて行くなど。その他、多くの OAARS 会員は、島に2つしかない「no-kill」(動物を殺さない方針)のシェルターで何時間もボランティアとして働いています。

沖縄にあるシェルターの1つは——皮肉にも「スイートホーム」と呼ばれていますが——犬30頭の世話(給餌、掃除、医療費補助など)

について全面的に私どもの活動に頼っています。スイートホームは、OAARS が関わる以前はあまりにもひどい状態だったため、保健当局から保護動物を全部大里に送って殺処分すると脅かされていました。幸い、OAARS ボランティアが入って、シェルターの状態を改善し、保健局の規定と期待に添うよう懸命に努めました。2つのシェルターで、私どもは、ドッグランを造り、柵を立てたり、セメントを流し込んだりして、飼育環境を大幅に改善しました。何よりも特筆すべきなのは、避妊去勢運動の資金援助を続けていることでしょう。フリーマーケットとか手作りケーキバザー、その他の催しによって資金を調達し、保護動物やシェルター内の多くの犬猫に避妊去勢手術を施す費用を捻出しています。これは私どもの団体が誇る重要な成果の1つです。OAARS のメンバーは島の Single Marine Program (米海兵隊単身者用計画)と連携して、もう1つのno-kill シェルターである「ケルビム」でのボランティア活動に多くの時間を費やし、沖縄最初の「低料金で不妊手術を提供するクリニック」設立を目指して努力を続けています。これはめざましい進展であり、将来の変化を促す大きな力になるものと信じます。

最も劇的な「救出劇」は、昨年、西海岸の恩納という小さな村で起きました。たまたま OAARS のメンバー2人が北に向かって車を走らせている時、道を曲がり間違えて森の中に迷い込んでしまいました。突然逃げ場のない空間に出たのですが、そこには、見るに耐えない哀れな状態の犬が少なくとも40頭ほどいました。大部分は木につながれ、餌も水も与えられず、死にかかっています。老犬もいれば、子犬も含まれ、中には妊娠している雌犬もいます。病気のものも多く、全部が飢えていました。後にわかったのですが、そこは、長年飼っていた動物を始末しようとする地元の人たちの「ペット捨て場」として有名だったのです。もちろん、悲惨な光景に寒気をおぼえた私どもは、その恐怖感に駆り立てられ、すぐさま行動を起こしました。数か月のうちに、彼らを残らず、一時的な養育者のもとに、あるいは、永続的家庭に世話することに成功したのです。残念ながら、群れのうち2頭は、私どもが助け出す前に息を引き取りました——もう少し早く駆けつけていれば……と悔やまれます。しかし、残りは救出して、新しい飼い主を見つけることができました。中には、米国に渡り、幸せいっぱい、平和に余生を送っているケースもあります。この事件は、OAARS メンバーの誰もが忘れがたい、

特筆すべき、心を揺さぶられる経験でした。OAARS は多様なメンバーで構成されています。その中には、(1)各地の米軍支部に属する現役軍人；(2)軍人の配偶者、及び、扶養家族；(3)(国防総省直轄)学校の先生と生徒などが含まれ、そして……最後に忘れてはならないのが(4)地元に住む沖縄の人たちです。沖縄人とアメリカ人が共に手を携え、これら帰る所のない捨て犬／猫の救出に励んでいます。私どもは固い絆で結ばれており、共通目標のもとにこの関係が今後も継続され、時とともにいっそう強まるものと信じています。

OAARS について興味をお持ちの方は、私どものホームページ www.oaars.com にアクセスして下さい。里親を募集しているペットのリスト、ボランティアや寄付関係、今後の行事予定、様々な連絡先……など多くの情報をご覧になれます。

最後に保健所の方針に対する私どもの意見を申し述べます。OAARS としては、現在広く行われている野良犬／猫の殺処分方法を改めるべきだと考えます。ガス殺は、非人道的で、不幸な動物をひどく苦しめるものです。日本政府に要望します——ガスではなく、無痛の致死注射を早急に採用していただきたいと。また、リホーミング(譲渡会)に関して言えば、沖縄では、生後3か月以上の動物を里親に譲渡することが禁じられています——ごく稀なケースとして、動物愛護センター職員に認められる場合があるものの、それも、健康でフレンドリーな動物に限られるのです。

<http://www.oaars.com>

右ページ左側の写真は、恩納村に繋がれ、死を待っていたホリーです。この子は、OAARS メンバーのクリスティーンが助け出しました。ホリーは、私どもが現地に行ったその日、ちょうど出産したばかりでした。その晩、クリスティーンは心配で眠れませんでした——生まれたての子犬たちがカラスに食べられはしないかと——実際、以前にそんなことがあったとか。彼女は数人の仲間と一緒に、ホリーと子犬を助け出そうと長時間車を走らせました。クリスティーンと夫のシーは、保護の必要なホリーを手元に置いて面倒を見ようと思いました。そして、子犬たちの方は、アメリカに渡り、それぞれ、やさしい家族のもとに引き取られたのです。右ページ右側の写真は、安全な場所で子育てをしている時のホリーです。木に繋がれていた時と違って、安心した表情をしているでしょう？